



中村眞一郎

空中庭園

河出書房

空中庭園

昭和四十年二月十日 印刷
昭和四十年二月十五日 発行

定価六八〇円

著者 中村眞一郎

東京都千代田区神田小川町三ノ八
発行者 河出孝雄

東京都千代田区神田錦町三ノ三六
印刷者 小笠原秀雄



発行所

東京都千代田区
神田小川町三ノ八

株式

河出書房新社

振替口座（東京）一〇八〇二番

印刷・秀好堂 製本・中西製本

目次

一	歡迎会	四
二	清美の実家	二三
三	中年紳士	三七
四	車中にて	五〇
五	深夜	五八
六	田舎の人々	七八
七	プラネタリウム	九一
八	青年の反逆	九七
九	悪妻	一二三
一〇	長い一日	一二七
二	蟻地獄	一四〇
三	夜の祭	一五一
三	長い夜の残り	一六三
一四	怪物	一八〇

二五	上品な人たち	一九八
二六	性の深淵	二二
二七	暗い日曜日	三二
二八	陰気な復讐	三四
二九	催眠薬	三五
三〇	研究室にて	三六
三一	ガラスの壁	三八〇
三二	心の混乱	三九一
三三	無駄な別れ話	三〇二
三四	二つの世界	三一五
三五	絶望の深さ	三三九
三六	短かい一日	三三三
三七	急転回	三四六
三八	結婚申込	三五二
三九	病院にて	三六五
四〇	空中庭園より	三八三

長篇小説

空中庭園

一 歡迎会

魚見終太郎は片手にウィスキー入りのコップを持ったまま、部屋の片隅に、壁を背にして立つていた。彼のまえを同じようにコップを握った男たちが、泳ぐような足取りで、行ったり来たりしている。そして時々、思いついたように立ちどまつて、彼に話しかけてくる者があると、不機嫌に、無愛想に、彼が最少限度の言葉で返事をするので、相手はちよつと鼻白んだような表情になつて、また、立ち去つて行く。

——おれはまた、例の癖がでてきたな、と魚見は思つた。こうした大勢の集りのなかへ入ると、おれはいつも、次第に沈黙がちになり、人と話をするのが厭になる。その理由は、次々と話しかけてくる人間が、次々と別の話題を投げてくるのに対して、おれはいちいち真面目に受け答へるために、頭脳が酷使され、疲労してくるからだ。何もこうした会では、人々は首尾一貫した議論を展開しようとか、正確で矛盾のない意見を訊くとか考へているわけではない。しかし、その場の單なる思いつきにせよ、「先月の君の中国古代詩に関するエッセーの結論には反対だな」などと語りかけて来られると、おれはその男に向つて、自分の書いた文章の主題について、もう一度、説明しないではいられない。そこで、その主題を三つに分け、第一には、第二には、というふうに叙述しはじめる。ところが相手は、おれがようやく、第二の主題について説明を始めたところで、人群れのなかに別の知人の顔を發見し、「ちよつと失礼」と言つて、おれを放りだしたまま、立ち去つてしまふ。おれの胸は、半分出かかった意見がつかえて、不愉快になる。と、すぐまた、別の男が近寄つて来て、「今度、ぼくは薔薇の栽培をはじめたが、たしか君の家の庭には、珍しい種類があつたつけね」などと話しかけ

る。おれの精神のなかでは、中国古代詩と薔薇とが混り合つて、相手に対して、薔薇の話をする代りに、薔薇の詩について語ることになる。が、ようやくおれの心のなかで、詩の方が薄れて、生きた薔薇の姿が明快になりはじめた頃、また別の男が、「君の弟子の桐屋の、近頃の傾向は面白くないぞ」などと、割りこんでくる。

今度は、おれの注意は薔薇と桐屋との間で分裂する。おれは一方では「温室の作り方」について、他方では「政治と文学」について、即座の返答を用意しようと、ひとつしかない脳を使わなくてはならない。そこで、その返答は甚だ無愛想なものとなり、他人からは不機嫌な、高慢な男だと思われてしまう。そして、厄介なことには、おれは高慢な人間は大嫌いだし、自分が他人から高慢な男だと見られることは、尚さら、嫌いなのだ。若い桐屋が他人から高慢に思われて得意がつているのなどは、子供らしいとしか見えない。おれの四十年間の経験では、高慢さは大概、視野の狭さからくるので、自分の判らないものは輕蔑するという態度は、野蠻人特有の習性なのだ。そしておれは「文明人」なのだ。……

「文明人」「文化人」——魚見は、この二つの言葉を口に出して呟いてみた。すると、ちょうど、銀色の盆を掌で支えて、彼の前を通りかかった白服の給仕が、自分が呼びとめられたと誤解して、彼にウイスキー入りのコップをひとつ、盆から取つて差しだした。彼のコップのなかの液体は、もう底の方で氷水だけになっていた。で、魚見はその誤解を利用してコップを交換した。

「文化人」——おれは文化人だ。誰が発明した言葉か知らないが、おれは現代日本の文化人のひとりだ。そうして、このパーティーに集つてゐる何十人かの男と、何人かの女は、皆、文化人なのだ。ところで、彼等に向つて「文化人」と呼びかければ、大概の人間は厭な顔をし、「おれは庶民のひとりだ」と答えるだろう。それが現代日本の文化人の精神的習性なのだ。そうして、その習性のおかげで、「庶民」という言葉は、途方もない神話的な姿にまで異常成長を遂げている。それは昨日、ある雑誌の口絵で見た、メキシコの砂漠のなかの巨大なサボテンの姿に似て、グロテスクで、そして、こちらの神経を脅かす恐しさを持つている。

おれは恐れている。数の多いものの全てを恐れている。と、魚見は考えつづけた。「庶民」という言葉が嫌いなのは、その言葉が無数の人々の顔のひしめき合つてゐる映像を呼び起すからだ。そして、おれは、その顔の

奥の、ひとつひとつの魂を理解したいと悶え、それが不可能なために絶望してしまふのだ。いや、人間だけではない。インドの寺院の、あの無数の石像の重なり合ひは、写真を見ただけで、宗教的な、あるいは美的な感情を喚びますより先に、おれに嫌悪と恐怖とを惹き起す。それは、おれの理解を超越する。そういう訳だから、おれは数十人の人々のこうした集りにも、すぐ疲れてしまふのだ。すでにこれだけの人数の個人個人を、おれは理解することができない。そして理解できない人間と、同じ部屋に入れられているということは、やはり嫌悪と恐怖との原因になるのだ。……

「先生……」

と、甘えた口調で囁きながら、妻の清美が小柄な体を魚見に押しつけてきた。清美は結婚以来、一年になるのに、彼を「あなた」と呼ぶのがてれくさいと称して、結婚前同様に、また彼の周囲の人々同様に「先生」と呼んでいる。しかし、二人きりの時はともかく、他人の前で「先生」と呼ばれると、魚見は、この十幾つ齡のちがう若い妻が、自分たちを夫婦だと見られることに恥ずかしさを感じているのではなからうかと疑って、不快になる。そして、今も、早速、不愉快になった。が、野蠻人ではない彼は、自分の素朴な感情を露骨に表明することを好まない。だから、きわめて不機嫌な調子で、正面を向いたまま、別のことを言った。

「人が多すぎて、くたびれてしまった。出て来るんじゃないかったよ。家で本を読んでいた方が、ずっとよかった。」

魚見は自分の脇にかかっていた妻の体の重みが急に取れたのを感じた。その妻の動きが、妻自身の感情の急変を彼に知らせた。彼は突然に不安になって、妻の方を振り返った。

「私がついて来たんで、それで面白くないんでしょう。」

妻の頬にかすかな痙攣が走った。妻が不機嫌になったということが、彼自身の不機嫌を忘れさせた。魚見にとっては、身近の人間のちよつとした気分の変動も、神経に耐えがたかった。とくに妻の不機嫌は。そこで大急ぎで、彼は妻の機嫌をとった。

「パリシー夫人を、よく見たかい？」

オデット・パリシーはハリウッドの女優だった。そうして、今夜のこの歓迎会の主役であるドイツの詩人の新しい妻だった。詩人は新婚旅行を兼ねて日本にやって来たのだ。そして、詩人がドイツで出版した『現代日本詩選』の翻訳の手伝いをした桐屋翼造が、この会を開くについて働いたので、桐屋の先輩である魚見のところへも出席を求める通知が来たのだった。その通知を見て、魚見は妻に、アメリカの女優の顔を見てくるかと冗談を言った。すると妻は、私も見たいわ、と本気になり、そして、魚見が詩人の集りなんて詰らないよと言って、妻の出席を停めようとする、かえって妻は依怙地になって、会費をけちけちするかとか、人前に私を出すのが恥ずかしいのか、と言い募った。そして、葉書を彼の手から奪うと、「出席」という活字の下に「二人」と自分で書き添えた。

魚見はそうなってみると、大概の場合にそうであるように、その事態を受け入れて、そこから利点を発見するように努めた。彼は知識人の集りに、知的な問題に興味を持たない妻を連れて行くことで、自分も妻も気まずい思いをすることになる、というふうには考えないで、珍らしく一緒に外出することで妻を喜ばすことができるし、また、妻はアメリカの有名な映画女優を見ることで満足するだろうと考えることにした。——しかし、やはり、妻は最初に出席通知の来た時のめごとを覚えていて、今、彼に皮肉を言ったのだ。ところが彼の気を変えた質問にたいして、

「遠くからちよつと見ただけ。前の方へ行くのが恥ずかしいんだもの。……」

と、妻はまた機嫌を直して、笑顔を作った。何だ、もう直ったのか、と彼は寧ろ不愉快さを増しながら思った。それほどすぐ直るものなら、不機嫌にならなければいいのに。彼の心のなかには、ほんの今、妻の頬に稲妻の走った時に感じた不快さが、汚点のようにまだ残っていた。その汚点は、多分、今夜一晩中、消えないだろう。「しつこい人」と、妻は罵るかも知れないが。

しかし、魚見はその不快さを、全然、表面に見せないで、妻の顔を覗きこむようにして言った。「じゃあ、桐屋に紹介させよう。おいで。」

それから妻の腰に手を廻すと、人波の中へ入って行った。

妻は、

「私、英語ができないのに。」

と、心細そうな声を出した。が、魚見の手に押されるようにして、人々の間をすり抜けながら、足を前へ運んだ。

ようやく前の方へ出ると、机があつて、その机の上に、最近ドイツで出版されたばかりの『現代日本詩選』が頁を開いたまま、菊を挿した花瓶のまえに飾つてあつた。

机の向うには、背の高いドイツの詩人が立つて、桐屋と話し合つていた。それから、詩人に背を向けて、彼の妻の女優が、映画雑誌の記者らしい振袖姿の女性と、熱心に会話を続けている。

桐屋はつかえつかえ、ドイツ語で詩人に受け答えしていた。が、魚見の視線を感じたらしく、不意に振り返つた。

「あ、魚見さん、紹介しましょう。」

と、桐屋は助かつたという表情で、魚見に話しかけた。

「ぼくは一時間以上、外国語で話していると、相手の言うことが判らなくなるんですよ。今、ちょうど限度に達しかけていたんです。代つて下さい。」

魚見は自分が外国人と話すのは、きわめて苦手であることを知つていた。生来の恥ずかしがり、不自由な言葉を操らなければなくなると、一段と激しくなり、頭のなかから、簡単な単語さえ逃げてしまう。桐屋のように、文法も無視し、思いつかない言葉は、他の外国語で代用させながら喋るといふような芸当は、とうていできない。

しかし、桐屋はそうした彼の困惑など気にするような、神経の細かい男ではなかつた。彼はすぐドイツ人に向つて、言つた。

「ヘル・クルツ。コノ人ハ、私ノ先生デアリ、現代日本ノ最モ優秀ナ……」

そこで、桐屋はちよつと困つたような表情で魚見を見た。魚見はまたか、という苦い思いが胸のなかを過ぎ

るのを感じた。魚見は、最も簡単なレッテルを貼ろうとする世間が、彼の職業を限定するために、「哲学者」とか「大学教授」とか「随筆家」とか「評論家」とか、夫々に坐りの悪い言葉を、無理して使っているのを不快に感じてきた。「哲学者」としては、彼には十九世紀のフランスの、しかし今世紀になつて改めて評価され直した、メヌ・ド・ピランという哲学者についての一冊の評伝の著書がある。大学では哲学史の講義もしている。しかし、彼は哲学研究者でもないし、いわんや自分の哲学を作り出してはいなかった。大学から月給を貰っていることは事実である。しかし、西洋の大学の教授のように、専門的な学問をしているわけでもない。小説や詩を書かなければ、「随筆家」であり「評論家」であるということになるのかも知れないが、それも、評論を商売にしている人々から見たら、彼の書くものは、実に迂遠で時局性に乏しい閑文字である。

だから、他人は常に、彼を限定する言葉の発見に苦しむ。彼が新聞に原稿を書く時は、先方の記者は、「肩書を何とかしましょうか」と、わざわざ訊くくらいである。彼は、そうした度ごとに、おれは要するに、ディレクターだに見られて、どのグループからも他所者扱いされ、また世間からは「文化人」として敬遠されるのだ、と心のなかで呟いた。今もまた、彼に最も近い桐屋さえが、紹介の言葉につまんでいる。

「……詩人デスカ？」

と、クルツ氏が助け舟を出した。

桐屋は嬉しそうな顔をして答えた。

「ソウデス。詩人デス。」

それから魚見の方に向き変ると、

「ディヒターというのは便利な言葉ですね。あなたの書く形而上学的なエッセーなんて、たしかにディヒターの仕事だと、向うなら言われるだろうからな。それでいいでしょう。」

と、陽気に言い足した。

「まあ、それでもいいがね。最モ優秀ナル、は余計だね。最モ有名ナラザルくらいのところだよ。」と、魚見は言い返した。

「アナタハ、うえるぎいるトほらあつトノ、ドチラヲ好ミマスカ？」

と、本物の詩人は、訊いて来た。そこから、魚見の文学的傾向を理解する端緒を発見しようとするつもりらしかった。魚見は不意打ちをくらつて、頭のなかで、この古代ローマ最盛期の二大詩人の仕事を対照させることに、大急ぎで従事した。彼がこの両方の詩人の著作を覗いたのは、二十歳代だった。オックスフォード版の表紙が、記憶のなかから甦つてきた。それから、キーツとヴァレリーとの呼掛法と、ウエルギリウスとのそれを比較した、随想風のエッセーを戦前に書いたことも思いだした。また、ホラチウスについては、その詩を自分の文章のエビグラムに使つたこともあつたと、あわただしい記憶が告げた。が、彼の内部では、『アエネイス』と『歌唱集』と、どちらに味方するかというふうな考え方が可能なほど、ローマの詩人たちは生きてはいなかった。それに、日本の文化的環境の中では、そのような問いの発せられる機会はないのだ。日本人の西欧文学理解は、近代を遡ることはないのだから。彼は無理にでも結論を出そうと苦慮した。

すると、桐屋は沈黙している魚見を、じれつたそうに眺めていたが、急に詩人に向つて注釈的に言つた。

「彼ハ最近、中国ノ古代詩ニツイテ、文章ヲ書キマシタ。」

詩人の深く窪んだ眼が輝いた。

「オオ、ソレデハ、りい・ぽおトとうふうトノ、ドチラヲ好ミマスカ？」

「クルツ氏は中国の詩にも、深い興味を持つてゐるんですよ。どうも、日本人より西洋人の方が、中国のことも熱心にやつてゐるみたいだなあ。」

と、桐屋は笑いながら魚見に言つた。

李白、杜甫。——これではまるで、古典科の試験を受けてゐるみたいだ、と魚見は苦笑した。それから、自分の性質が、相対立する二つのものから、一方を選択するのが最も不得意であるということを、改めて思った。だから、こういう大まかで重要な質問に、外国語で簡明に答えるというようなことは、到底、手に余るのだ。

「李白ハ……彼ハ……」

魚見は先ず主語を発音したが、日本語の場合と異つて、言葉より思想が先に出てこないかぎり、喋るわけに

は行かなかった。彼はまた絶句した。相手の詩人は怪訝な表情で、彼の顔を見下ろしている。

その時、突然にクルツ氏はオデット夫人に手を引っぱられた。詩人は向き直り、そして、今まで夫人が相手をしていたフランス語を話す外国人と挨拶をはじめた。

魚見はようやく危機を脱して安心した途端、今まで妻を忘れていたことを思いだした。

「桐屋君、女房をオデットさんに紹介してくれないかな。直接、話をしたいらしい。」

と、魚見は言った。

「ええ、いいですが……」

と、桐屋は好意に満ちた表情で清美を見た。

「私、でも英語、喋れないのよ。」

と、清美は答えて赧くなった。

「ドイツ語だよ。」

と、魚見が囁いた。

「どうせ話せないんだもの、同じことよ。でも、桐屋さん、先生も今、話ができなかったんでしょ？」

清美は桐屋の、迎え入れるような顔付に向つて、甘えた口調になった。清美が魚見自身よりも、彼女に年齢の近い、彼の周囲の青年たちの方へ、むしろ親しそうな調子で話すとき、彼はいつも不快な孤独感を意識した。今が、また、そうだった。

彼は明らかに厭な顔をして、小声で口を挿んだ。

「あんな大問題に、いきなり答えられるものかね。」

「いや、クルツ氏は、いつもあの調子ですよ。ぼくがはじめて今度、ホテルへ訪ねて行つたときも、いきなりぼくは、君ハ死ニツイテ如何ニ考エルヤ、愛ニツイテ如何ニ考エルヤ? って訊かれて往生したんです。」

桐屋と魚見とは声に出して笑つた。清美は桐屋の話のなかの肝腎な部分が原語で言われたために、ひとり取り残されたような表情で、眉のあたりに、また稲妻を走らせた。——また不機嫌になる。だから、こんな会には

出てこなければいいのに。おれはどうせ、知り合いのジャーナリストなどに、あとで、魚見の奴、若い女房を貰ったので、どこへでも連れて歩いてゐる、と嘲笑されるのだ、と魚見は思った。大体、ハリウッドの女優の顔を見たいなどという、妻の子供らしい、あるいは「ミ－ハー族」らしい感覚が、初めから彼には不快だったのだ。それに、彼女が喜ぶのなら、まだ我慢できるが、彼女自身、場違いな感じで、さつきから妙におびえたような顔付で小さくなっている。この不快の蓄積が、今夜、帰宅後に、おれに向けて、非合理にも爆発することは眼に見えている。そしておれは、書齋における数時間の平和を、そのために犠牲にしなければならない。

しかし桐屋の方は、無限に快活だった。彼は清美に向つて、慣れた友人に対するように説明した。「死についてどう考えるか、愛についてどう考えるか、つていう意味ですよ。」

「じゃあ、桐屋さんは、愛について、随分、いろいろ話したんでしよう？」
と、清美もたちまち陽気になつて、桐屋の手をぶつ真似をした。

「ぼくなんか駄目ですよ。愛のことなら、先生の専門だ。」

桐屋は機嫌の好い余りに、無遠慮なことを言う、と、魚見は思った。清美の気持を解きほぐしてくれたことは感謝すべきなのだろうが、しかし、今の仄めかしは、清美を刺激しないとも限らない。それに、おれが今迄三回、結婚生活を失敗しているというのは、不幸な偶然なのだ。最初の結婚は、戦争による余儀ない別居生活が原因だし、二度目は、妻の自殺のためだったし、三度目は、今なお原因が判らないが、いずれにしても、おれは、いわゆる女蕩しというようなものではないのだ。しかし、「四回結婚した」というレッテルは、容易に「女蕩し」という符号と重なり合うらしい。現に清美も、彼に最初に会つた時、「先生はすごいんですね」と、狎れなれしく訊いたくらいだ。清美が彼に接近した動機には、たしかに若い娘の、女性関係の多い中年男に対する好奇心もあったのだ。そしてその好奇心はやがて、競争心に変り、ついに彼の家に乗りこんで来て常子を追い出した恰好になつてしまつた。彼の妻となつてからは、今度は攻守所を変えて、いつも嫉妬に胸を燃やしながら彼を見張っている。だから、桐屋のこの不謹慎な冗談なども、帰宅後に充分に一晚の口争いの原因となるのだ。

「桐屋さんだつて、すごいって話じゃない？」

と、清美は、今の魚見の女性関係に関する桐屋の仄めかしに、別に気分を害した様子もなく、むしろ、この気づまりな会のなかで一時間ほどの余儀なくされた沈黙を、一氣に取り戻そうというように、軽口をたたいた。

「誰が言つてました。先生ですか？ 男性はいつでも、自分が危くなると、他人の方がもつと猛烈だという伝説を流布して、自分はその蔭へかくれるという習性があるんですよ。」

と、桐屋は早口に喋りながら、魚見の方を見て笑つた。その笑いは、今の魚見の心を彼の冗談が傷つけているということに全然気づいていない、いい気な彼の精神状態を露骨に示していた。

「ばかだね、君たちは。」

と、魚見は、とにかく桐屋の饒舌が実際の被害を起さないうちに、話題を変える必要を感じて、断ち切るように言つた。

しかし、清美は一向に感じなかった。

「先生だつて同じよ。男つて皆、そうよ。」

「女もまた、然りですよ、ね。」

と、桐屋もまだ、調子に乗つていた。

魚見は我慢がなくなつた。そこで、不快な表情をあらわに表面に出して言つた。

「頼むよ、オデット夫人に紹介を。女房はそのつもりで、二千円也を払つて来たんだから。」

桐屋は魚見の堅い顔付を見て、ようやく相手の心が、自分の浮わつた気分と離れていることに気づいたらしい。彼は途惑つた表情をつくり、しかし、なぜ、魚見の機嫌が急に悪くなつたのか判らないらしく、ただ、時々、うちの先生はこういう不可解な気分の変化を示すのだ、今もその悪い癖がでたのだ、とだけ考えて、それ以上は分析を進めることもしないでいるらしかった。この男には、おれの気持の細かい変化が理解できたためしがない、と魚見は諦らめて、桐屋の顔を見ていた。

彼の視線が桐屋に急に真面目な顔を作らせることになつた。桐屋はオデット夫人の前に廻つて、何か小声で

話しかけた。それから、眼顔で清美に含図した。

清美は魚見の後ろに隠れるようにして呟いた。

「厭だわ、私、お話できないもの。」

「まあ、いいじゃないか。桐屋が通訳してくれるよ。」

と、魚見は清美の背を抱くようにして、彼女を前に押し出した。

ハリウッドの女優は、こちらに振り返り、日本人なら最も親しい相手にさえ見せないような、極端な親愛の情を眼に浮かべながら清美を見た。

その感情の大袈裟な表明が、いよいよ清美を怯えさせたらしかった。女優は二三歩、こちらへ歩いて来た。

「こんばんは。」

と、彼女は覚えてたらしい日本語で言った。それから、清美と魚見とを見比べて、また、嬉しそうな眼付をして見せた。

桐屋が大急ぎで、この二人は夫婦であると説明した。

「何トイウ、若クテ可愛イ奥サンナノデショウ。旦那様ハ幸福デスネ。」

と、彼女は早口の英語で言った。

桐屋は迎合的に笑った。

「彼ハ哲学者デス。シカシ彼ノ妻ハくさんちつペトハチガイマス。」

と桐屋は夫人に言った。

「オオ、哲学者！ 弁証法。ディアルクチック 対 自、即 自。フュール・ジツヒ ……彼ノ奥サンハ頭痛ガシマス。」

と、女優はまた笑った。

清美は困惑しきった表情で、魚見を見上げた。

「日本ノ奥サン、皆、恥ズカシガリ。あめりかノ奥サン、皆、威張りマス。」

と、夫人は早口で続けた。